

法と合意に基づく統合的沿岸域管理の枠組み検討

交告尚史 法学政治学研究科

沿岸域管理の枠組みの検討に当たっては、沿岸という概念によって海岸のみを捉えるのではなく、その後背にある森、そこから発する河川、そしてその終着点たる海をネットワークとして把握したいと思っています。そのためには、森・川・海を結びつける何らかの観点を設定しなければなりません。それが見つければと期待して、平成23年の3月末に、高知県の四万十川周辺で聞き取り調査を行った結果をご紹介します。

まず、29日に高知県林業振興・環境部を訪問し、四万十川条例の運用状況について担当者から説明を受けました。この条例は、四万十川およびその流域の保全を目的とする条例ですが、保全生態学の知見を考慮したのではないと思われる魅力的な条例です。しかし、実際の運用はなかなか理念どおりには行かないようでした。

その後、窪川町の四万十川財団（高知県および四万十川流域市町村が半々で出資）で、管轄森林事務所の森林官から、所管国有林の特質と管理上の問題点について説明を受けました。樹幹を流れる水が地面の粗目の穴にはスッと染みこむのに対し、細目の穴には圧力で押し込まれるような感じで入っていくとか、四万十

では山の中にも海神神社がいくつか存在しているといった話がとくに印象に残りました。

翌30日には、津野町にて、四万十川水系で近自然工法を実践してこられた熊田光男氏に面会しました。それまでの落差工で出来上がった段差を魚が遡上できるようにするとか、河川敷地と外部を結ぶ動物専用道を造るといった工夫について、現場を歩きながら説明して下さいました。

さらに、31日には、高知大学で研究教育部総合科学系の飯國芳明教授と面会し、森・川・海のネットワークという観点に関する教授の見解をお尋ねしました。森・川・海を連結する鉄、栄養塩、シルトという3つの連結要素のうち、鉄に関してはかなりの研究蓄積があり、とくに「森林の腐葉土から流出したフラボ酸鉄が川を流れて海に至り、海の生態系を支える」という松永勝彦博士の見解が有力なのだそうです。それと比べると、栄養塩に関しては研究蓄積が乏しいとのことでした。

現在、これらの調査結果を講義にどのように活かせるか検討しているところです。